

編集後記

2024年7月より、私、鹿住倫世が『企業家研究』の編集委員長を拝命いたしました。同時に、編集副委員長には稲垣京輔氏（新任）、大島久幸氏（新任）、新藤晴臣氏（再任）、中島裕喜氏（再任）、平野恭平氏（再任）にご就任いただきました。編集委員も一部新任の方にお入りいただき、新体制で『企業家研究』の編集を務めさせていただきます。引き続き、よろしくお願いいたします。

『企業家研究』第25号では、「論説」1本、「ケース資料」1本、「共通論題報告」3本、「書評」5本、および「FES便り」を掲載します。

「論説」は、1900年代のアメリカ合衆国西岸に渡って創業し、蟹缶詰を日本から北米に輸入した日系商社の事例を詳細に紹介しています。アメリカではあまり食われていなかった蟹を初めて缶詰にして、独自のブランド名をつけて販売したという企業家的な活動は注目に値しますが、その後、三菱商事など大手企業の参入や戦争によって事業の継続が困難になり、またほかの事業への転換も進まず、同社は閉店となります。新規参入と競合、環境変化への対応の成否が企業の命運を決定づけるという点は、現代の企業家活動にも通じるものがあると思います。

「ケース資料」は、シャープの1960年代から1970年代における新技術開発、新製品開発の経緯を掘り起こしたものです。新技術に基づく新規事業開発は、技術開発におけるマネジメントだけではなく、人材の採用や配置、そして人の心を引き付ける交流が重要であったことを物語っています。大学の研究者出身の開発責任者は、企業家精神にあふれる人であったことが印象的です。

第25号では、2024年7月21日に開催された年次大会の共通論題を企画された廣田誠氏の「問題提起」および、報告者3名の「共通論題報告」を掲載します。共通論題のテーマは「物流問題と企業家活動」で、「物流の2024年問題」がクローズアップされている折、時宜を得たテーマでした。

3名の報告は、近代の保税制度の導入経緯や、

高度成長期における日本横断運河計画に関するもの、そして近年の物流問題と、時代に沿って表出する問題を取り上げ、大変興味深い論説となっています。

「書評」は、いずれも2024年に刊行された経営系2本、歴史系3本が紹介されています。各評者の視点、評価を読むことによって、さらにこれらの文献の理解が深まることと思います。

「FES便り」は、今号から「講座・企業家学」と「企業家に聞く」の両方について、直近に開催された分を報告していただくこととしました。できるだけ新鮮な情報を皆様にお届けしたいと考えての変更です。

以上が第25号の内容です。年2号体制も定着し、年4回の投稿締め切りごとに数本、論説等を投稿いただけるようになりました。厳正な査読を経て、レベルの高い論説等をコンスタントに掲載できるようになったと感じております。今後とも、皆様のご協力により、学術誌として評価される『企業家研究』を編集してまいりたいと存じます。よろしくお願いいたします。

（鹿住 倫世）